

第3節 小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査

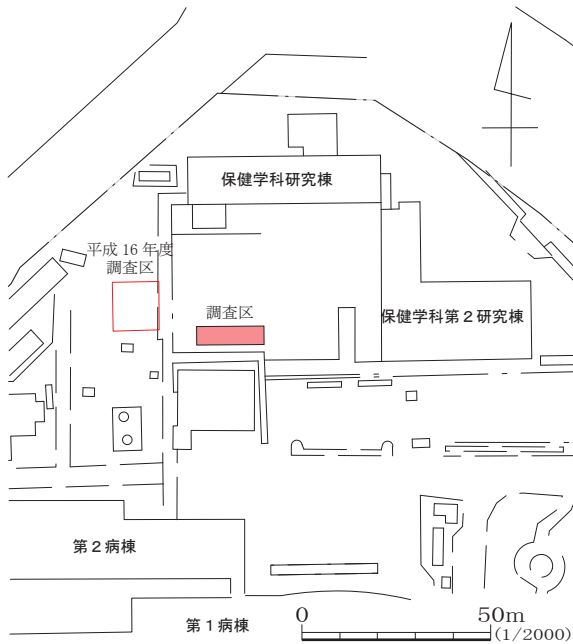


図 82 調査区位置図



写真 105 調査地遠景 (北上空から)

1. 基幹・環境整備及び診療棟・病棟新営工事に伴う予備発掘調査

調査地区 小串構内保健学科研究棟南側空地

調査面積 90㎡

調査期間 平成26年9月5日～10月7日

調査担当 横山成己

調査結果

(1) 調査の経緯(図82、写真105)

小串構内北部、附属病院病棟北側駐車場および保健学科福利棟敷地において、診療棟・病棟の新営工事が計画された。山口大学医学部構内遺跡は、北方ほど包含層中の遺物の密度が高く、南方へ移行するに従い遺物の密度が低くなる傾向にあるが、当開発予定地は自然堆積層中に遺物が流入する北限と推定される。平成16年度に実施した基幹整備(地下オイルタンク他)工事に伴う試掘調査^{註1}においては、旧耕土・旧客土(江戸後期の造成土)から遺物が出土したものの、下位に約1mの無遺物層が確認され、最下層の動物遺存体(貝)が堆積する旧海底面に縄文土器や土師器をはじめとする遺物が検出された。今回の調査では、旧客土下の自然堆積層がはたして無遺物層であるのか、そして旧海底面の遺物分布密度がいかほどであるのか確認することを主目的とし、開発予定地北限で平成16年調査区の東方約20m地点に東西18m、南北5mの調査区を設定し、予備発掘調査を実施することが平成25年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成26年3月24日開催)にて承認された。

【註】

1)横山成己(2006)「医学部基幹整備(地下オイルタンク他)工事に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成16年度－』,山口

(2) 調査の経過(写真106～111)

調査は9月5日に着手し、8日に重機掘削を終了した。9日以降は旧耕土、旧客土上面の検出とともに

に下位の自然堆積層を掘削。9月29日に最下層である旧海底面に到達し、諸記録作業を10月1日まで行った。埋め戻しについては、10月6・7日両日で実施し、現地調査を終了した。

(3) 基本層序(図83、写真112・113)

今回の調査では、現地表下約1mまでのアスファルト・砕石・造成土(合わせて1層とした)を重機により掘削した。造成土以下は人力により掘削となったが、最終的に現地表下3m付近までの掘削となるため、安全確保のため壁面に沿い1mの平坦部を設け段掘りを行った。造成土下位に確認した地層は5層に区分される。

2層は構内造成前の旧耕土で、層厚約10cm。近世および近代の遺物を包含する。3層は江戸時代後期(18世紀末)に耕地化のため置かれた客土と推定される。層厚30～40cmの黄灰色粘質土であり、水田床土として利用されたため上部は土壌化してにぶい黄褐色を呈している。近世の遺物を主として包含するが、中世の瓦質土器および古墳時代の須恵器も混ざる。4層は層厚20～60cmの灰白色と橙色砂の互層で、灰色弱粘質土が混ざる。西方ほど厚く堆積する。5層は層厚10～50cmの灰色粘土に砂が混ざる層で、4層とは逆に東方ほど堆積が厚く、調査区西端部では確認できない。4層および5層は調査区内においては無遺物層であった。6層は灰色砂と明黄褐色砂が混ざり合う層で、調査区東端には存在しない。最下層の6層は灰色砂礫層で、下部に動物遺存体(ハマグリなどの二枚貝)が厚く堆積する旧海底堆積層である。貝層上面から縄文土器や石錘、古墳時代のものと思われる土師器甕体部片が出土している。

(4) 遺物(図84、写真114、表11・12)

3層から近世の陶磁器や土師器が相当量出土しているが、ここでは6層上部、旧海底上面から出土した遺物を掲載する。

1は縄文土器深鉢口縁部片。口唇部に刻目を施し、外面には沈線文を施す。内外面とも摩耗しているが、外面にわずかに磨消縄文が観察される。縄文時代後期前～中葉であろうか。**2**は土師器甕体部片。外面にハケ、内面に削りが施される。**3**はやや大ぶりの石錘。扁平な平面楕円形の川原石両端に袂りを設けている。全長15.6cm、最大幅9.5cm、最大厚3.4cmを測り、重量は756.6gを量る。

(5) 小結

当調査は、平成16年度に実施した基幹整備(地下オイルタンク他)工事に伴う試掘調査成果を完全に追認する結果となった。すなわち、近世の客土(3層)の下位に約1mの無遺物層が存在し、最下層の旧海底面より縄文時代から古墳時代の遺物が出土するという内容である。遺物の内容も、縄文土器、土師器、石錘と完全な一致を示している。これらの遺物の由来地は、小串構内北後背に北から南に延びている小羽山丘陵と見られ、古墳時代まで丘陵直下が海岸線となっていたことが分かる。小串構内北部での既往調査においても、弥生土器は散見されるものの量的に少なく、縄文時代後～晩期と古墳時代前～後期の遺物が主体であることを考えると、丘陵南端部に当該期の集落が展開していた可能性が高い。

調査原因である診療棟・病棟新営の開発域は広大であるが、旧海底面での遺物の散布が希薄であったことを根拠として、調査は予備発掘にて終了することとし、設備工事等で掘削深度が現地表下2mを越える場合は工事立会にて埋蔵文化財保護対応を行うことが平成26年度第2回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成26年10月3日開催)に諮られ、承認された。

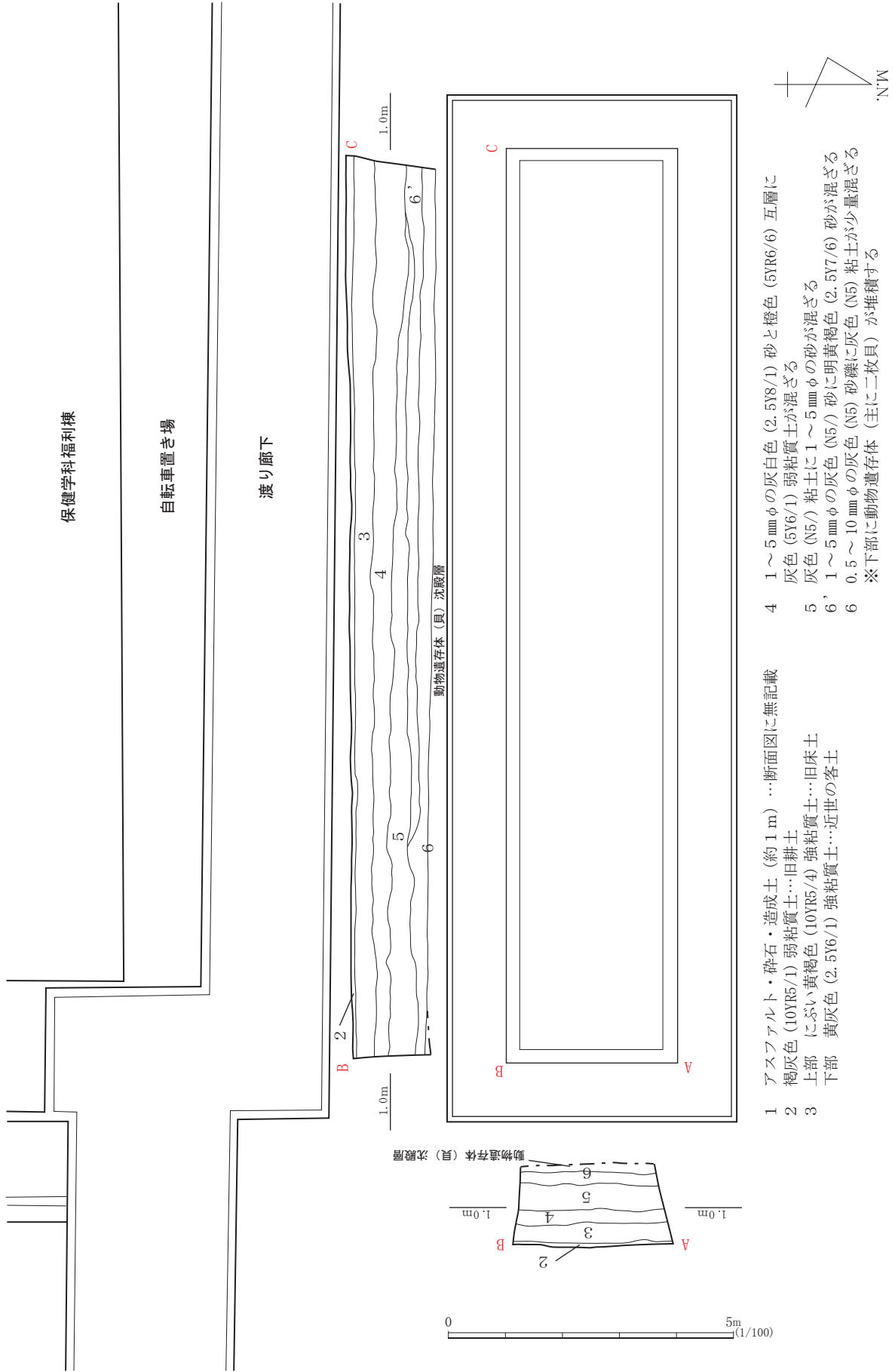


図 83 調査区平面図・断面図



写真 106 重機掘削 (南西から)



写真 107 2層上面検出状況 (東から)



写真 108 3層上面検出状況 (東から)



写真 109 作業風景 (東から)



写真 110 6層 (生物遺存体) 検出状況 (東から)



写真 111 6層遺物出土状況 (北から)



写真 112 東壁土層断面 (西から)



写真 113 南壁土層断面 (北東から)

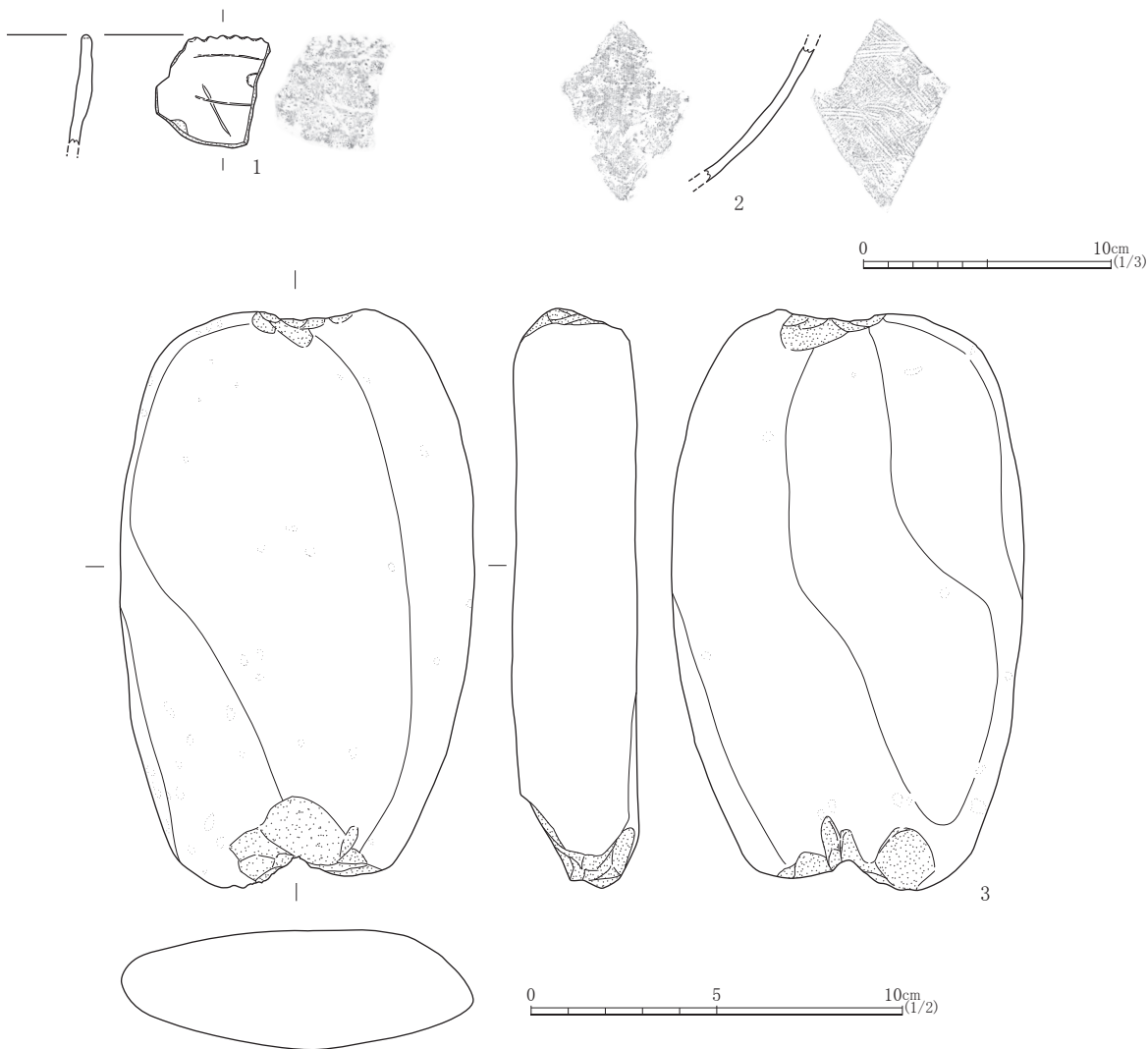


図 84 遺物実測図



写真 114 出土遺物

表12 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
1	6層	縄文土器 深鉢	口縁部	③4.4	①②灰オリーブ色(5Y5/2)		密:0.5~3mmφの石英・雲母 が少量混ざる	口唇刻み目
2	6層	土師器 甕	体部		①暗灰色(N33) ②灰色(10Y4/1)		やや粗:0.3mm~2mmの砂粒 やや多く混ざる	

表13 出土遺物(石器)観察表

法量()は残存値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	法量(cm)				石材	備考
			①長さ	②幅	③厚	④重量(g)		
3	6層	石錘	①15.6	②9.5	③3.4	④756.6	石英斑岩	

2. 基幹・環境整備及び診療棟・病棟新営工事に伴う立会調査

調査地区 小串構内特高受変電棟北側空閑地、保健学第2科研究棟南側空閑地

調査面積 30㎡ **調査期間** 平成26年12月11日、平成27年3月17日

調査担当 横山成己 川島尚宗

調査結果

診療棟および病棟新営工事に伴い、共同溝の新設が計画されたため、工事立会を実施する運びとなった。ただし、共同溝の大部分は矢板を設けての工事であったため、土層断面観察可能なオープンカットされる2箇所限定して調査を実施した。

A地点は、平成16年度に実施した基幹整備(地下オイルタンク他)工事に伴う試掘調査区^{註1}の西に隣接した地点で、現地表下2mの掘削が予定されていた。調査は12月11日に実施したが、降雨のため工事坑の断面が崩落しており、安全性が確保できないため土層精査を断念した。上部から見た限りでは、掘削は造成土内にとどまっていた(図86)。

B地点は、保健学科棟南側にて計画された共同溝工事地点である。現地表下2.2mの掘削が実施され、1mの造成土下にそれぞれ2枚の旧耕土および旧床土、その下位に緑灰色シルト混じり砂層を確認した(図87)。下位の旧耕土および旧床土は江戸時代の客土であり、最下層は海成砂層と見られ、小串構内北部(体育館・職員宿舎等敷地)にて実施した既往の調査において、同層から汽水域の貝類とともに弥生時代前期の甕が出土している^{註2}。

現在の山口大学小串構内は、宇部市域を南流する真締川の右岸に面して立地している。この真締川は、現在ではそのまま南進して河口へと至っているが、古くは小串構内の南端部、樋ノ口橋で流れを西に向け、助田町(現JR居能駅南側)付近を河口としていた。近世文書「舟木宰判本控」には、寛政11年(1799)2月「御届申上候事」として、「宇部村福富前殿領本川筋砂余分流出、川尻は遠干拓にて砂引不申、次第二川内高相成、洪水之筋は勿論地道ニても川筋の田地余分水損有之、年々御所務落猶百姓迷惑不大形儀ニ付、川尻を床海之所に付替被申付度」との要望書が見られる。要約すると「本川(真締川)が上流から運んできた土砂で河口が埋まってしまい、洪水被害が大きいので、河口を付け替えさせて欲しい」という内容である。この要望は実現し、その後同文書中に「弥水砂共ニ引宜ニ付、只今迄の川

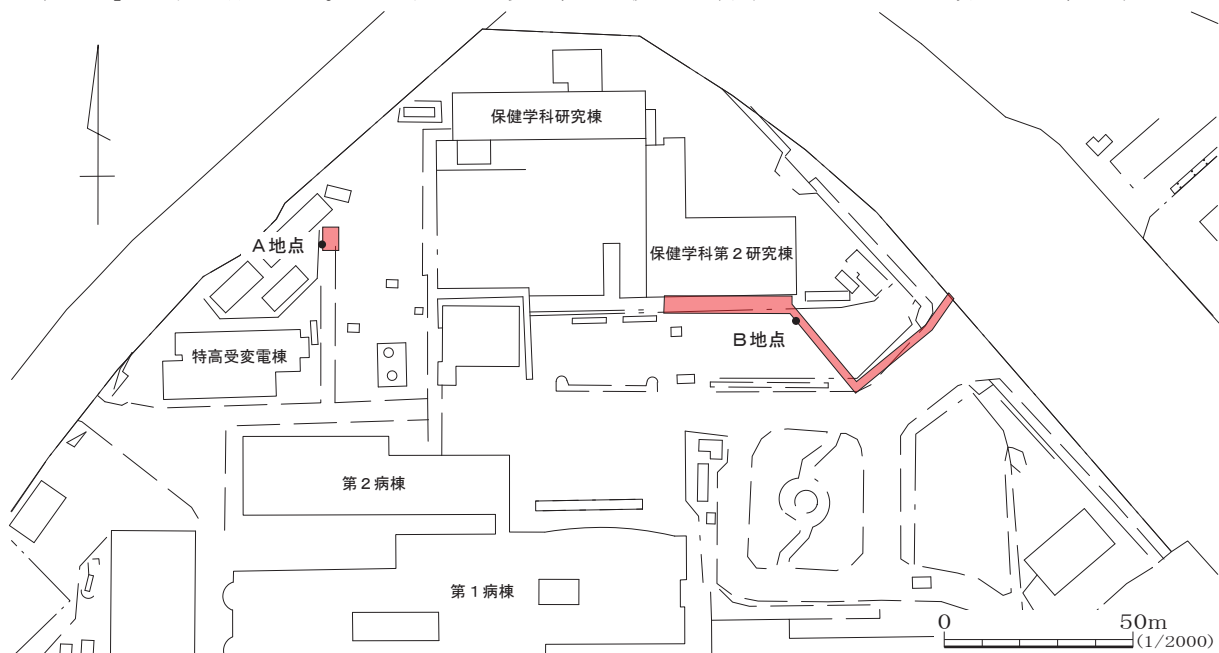


図 85 調査区位置図

おは川尻留被申附候」という記述が見られ、付け替え工事によって川の流れが改善されたので、旧河口を封鎖して周辺地を耕地にしたいと萩藩に願い出ている。

現在の小串構内の地盤高は標高約3mという低地に位置しているが、これまでに構内で確認された旧耕土はいずれも標高約1.5m～1.6mと一定しており、耕土下には平均0.4mの床土が形成されている。その下位には砂を主体とする堆積層が幾層にも埋存しており、この脆弱な地盤で安定的な集落や耕地が営まれたとは考え難い。

これらの状況は「舟木宰判本控」に所収されている文書の内容に一致しており、小串構内周辺は少なくとも19世紀初頭までは集落、田畑等が形成される環境になかったものと推測される。

なお、診療棟・病棟新営工事は当年度から平成30年度までの長期開発であり、工事立会は長期に及ぶこととなった。大規模開発においては工事立会にも様々な制限がかかるが、できる限りの埋蔵文化財保護対応を行っていく所存である。

【註】

- 1) 横山成己(2006)「医学部基幹整備(地下オイルタンク他)工事に伴う試掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成16年度－』, 山口
- 2) 横山成己(2006)「医学部職員宿舍他公共下水接続工事に伴う試掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成16年度－』, 山口

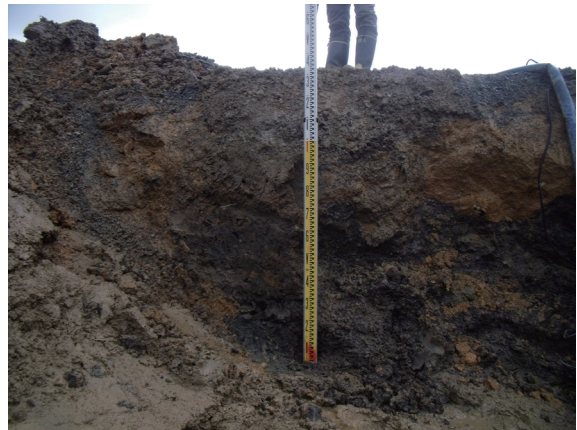


写真 115 A地点土層断面 (東から)

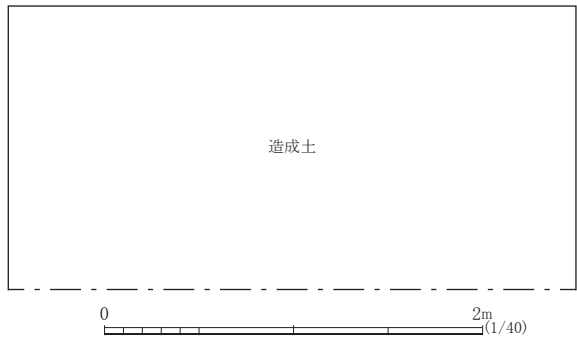


図 86 A地点土層断面柱状図



写真 116 B地点土層断面 (南西から)



図 87 B地点土層断面柱状図

3. 廃棄物管理棟新営工事に伴う立会調査

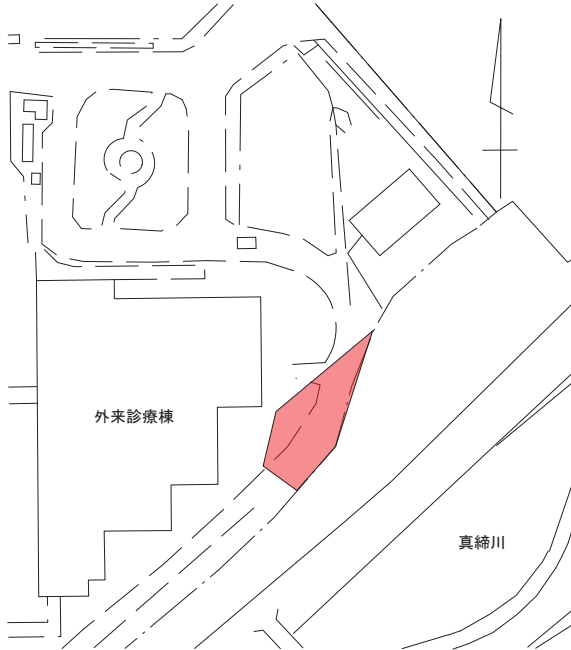


図 88 調査区位置図

調査地区 小串構内外来診療棟東側空地

調査面積 149㎡

調査期間 平成26年9月16日

調査担当 横山成己

調査結果

小串構内東部、医学部附属病院外来診療棟の東側空地において、廃棄物管理棟の新営が計画された。建物基礎の掘削深度は0.7mであった。

計画地は構内の東を南流する真綿川に隣接しており、また計画地の北側にて平成13年度に実施した医学部附属病院立体駐車場新営に伴う試掘調査の南端調査区(Cトレンチ)において、現地表下1.7mまで造成土^{註1}であることが確認されていたことから、埋蔵文化財に支障が生じる可能性は極めて低いと予想されたが、基礎工事予定日が同構内にて実施予定であった基幹・環境整備及び診療棟・病棟新営工事に伴う予備発掘調査(本書所収)期間と重複していることから、慎重を期して工事立会を実施することとなった。

調査の結果、掘削は造成土内にとどまるものであり、埋蔵文化財に支障が生じないことを確認した。



写真 117 工事風景(北西から)



写真 118 土層断面(東から)



図 89 土層断面柱状図

【註】

1) 田畑直彦(2016)「医学部附属病院立体駐車場新営に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)山口大学構内遺跡調査研究年XX I』,山口